慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	熊谷一彌、日本初のオリンピックメダリストにして花粉症患者： 花粉症の歴史と人類学にむけて
Sub Title	
Author	住田, 朋久(Sumida, Tomohisa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.131- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度三田社会学会大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

熊谷一彌、日本初のオリンピックメダリストにして花粉症患者

花粉症の歴史と人類学にむけて

住田　朋久

１．はじめに――熊谷一彌と錦織圭

テニス界での（1989- ）の活躍が伝えられる際に、繰り返し話題にのぼるのが、錦織のほぼ100年前に数々の記録を残した一彌（いちや）（1890-1968）である（表1）。錦織が2014年9月に全米オープンでベスト4に進出したときも、2016年8月のリオデジャネイロオリンピックでメダルをとったときも、「熊谷以来96年ぶり」と報じられた。

表１　熊谷一彌と錦織圭

	熊谷一彌（1890～1968）	錦織圭（1989～）
全米オープン	ベスト4（1918年）	準優勝（2014年）
オリンピック	銀（1920年アントワープ、単・複）	銅（2016年リオデジャネイロ、単）
デビスカップ	準優勝（1921年）	ベスト8（2014年）
最高ランキング	7位（1918年、全米3位）	4位（2015年）

熊谷は慶應義塾大学部理財科在籍中の1913年からアジア遠征を始め、慶應義塾を卒業した1916年のアメリカ遠征で全米ランキング5位となる[1)]。翌1917年に三菱合資会社銀行部（1919年より三菱銀行）に入社し、ニューヨーク出張所（1918年より支店）に勤めながら大会に出場した。1919年に全米ランキング3位、1920年のアントワープオリンピックで日本およびアジアではじめての単複銀メダル、1921年のデビスカップで準優勝という成績を収める[2)]。しかし、デビスカップでは、「草熱（そうねつ） hay fever」のため両鼻が詰まるまでに至り、苦しい試合を強いられた。そしてその翌年に帰国する。

この枯草熱は、花粉症のことである。現在、日本に住む人の2～3人に1人がスギ花粉症に罹患しているとも言われる[3)]。しかし日本での花粉症の発症が報告されるようになったのは1960年以降のことであり（1960年ブタクサ花粉症、1963年スギ花粉症）、それ以前は日本には花粉症がほとんど存在しないとされてきた。さらに、一般に花粉症が知られるようになり、この用語が定着するのは、花粉症の大きな流行のあった1979年ころである。

住田朋久「熊谷一彌、日本初のオリンピックメダリストにして花粉症患者花粉症の歴史と人類学にむけて」『三田社会学』第25号（2020年11月）131-135頁

そのため、熊谷がその半世紀前に枯草熱という名で花粉症を経験していたことは、発症から半世紀が経って日本で花粉症が一般に認知されたあとには、花粉症の研究者やテニスの関係者においてもほとんど知られていない[4]。例外として、熊谷がデビスカップに出場した 5 年後の 1926 年から 3 年連続デビスカップに出場した鳥羽貞三（1901-2002）による証言があるのみである。

熊谷の花粉症は、日本人が発症したかなり早い時期のものだと考えられる。本稿では、日本における花粉症の歴史の前史として、海外に渡った日本人が花粉症を発症した事例の一つである熊谷の経験を明らかにし、それが花粉症の歴史においてもつ意味を考える。

２．枯草熱と「世界三大花粉症」

熊谷が「枯草熱」を発症したことは、熊谷の二つの自著に記されている。一つは帰国の翌年に刊行された『テニス』（改造社、1923 年）、もう一つは死後 8 年経ってから刊行された『テニスを生涯の友として――熊谷一彌遺稿』（講談社、1976 年）である。

この「枯草熱」は、hay fever の訳である。イギリスにおいて、ボストック（John Bostock）が 1919 年に報告した症状を、1828 年に自身で「夏季カタル（Catarrhus Æstivus / summer catarrh）」と呼び、1829 年にゴードン（William Gordon）が「枯草喘息（hay asthma）」や「枯草熱（hay fever）」という名前を提案した[5]。それから約半世紀後の 1873 年になって、それが枯草でなく花粉によるものだということがブラックレー（Charles Blackley）によって報告された。しかし、いまでも英語圏では hay fever という表現が一般的である。ここでは、枯草熱と呼ばれていたものについても「花粉症」と呼ぶことにする。

ボストックが「夏季カタル」と呼んだように、イギリスやヨーロッパの花粉症は、5 月から 7 月にかけて多く発症する。これは牧草に用いられるカモガヤなどのイネ科の植物による。一方、アメリカでも 19 世紀に hay fever が広がったが、発症するのは主に 8 月から 10 月であり、その別名は「秋季カタル」だった。これは主にブタクサなどの草の花粉によるものである。熊谷一彌がアメリカで五年を過ごしたあとに花粉症を発症したのも、8 月中旬だった。なお、日本で 20 世紀の後半から増えたスギ花粉症が発症するのは 2 月から 4 月なので「春季カタル」と呼べそうだが、春季カタルは世界的に流行性結膜炎のことを指す。

これら三つを「世界三大花粉症」と呼ぶことがある（井上 1992: 60; トリップアドバイザー 2012）。もちろん世界各地でさまざまな植物による花粉症が発症しているが、ある一つの種の植物の花粉によってその地域の人口の多くが発症するのはこの三つと考えられる。

熊谷一彌がアメリカに渡り花粉症を発症したころには、アメリカでは花粉症はすでに一般的なものになっていた。日本の花粉症体験は、海外に移住した人々からはじまるのである。

３．熊谷一彌の花粉症

熊谷は、デビスカップで発症した花粉症について、2 つの自著で述べている。1 つは帰国直

後に執筆された『テニス』（改造社、1923 年）の附録「デービス、カップ国際競技参加」、もう 1 つは没後 8 年がたって刊行された『テニスを生涯の友として――熊谷一彌遺稿』（講談社、1976 年）である。なお、1976 年版の執筆時期は定かでない。

これらの自伝に書かれた描写は生々しいが、ここでは表 2 に熊谷の花粉症体験の記述をまとめた。なお、熊谷は 8 月にボストンやニューヨークで複数の「専門医」の診察を受けているが、効果的な治療は受けられなかった。

表 2　デビスカップ（1921 年）での熊谷一彌の花粉症

対フィリピン戦、対ベルギー戦は不戦勝
8 月 9 日、ボストン発　10 日、シカゴ着　15～17 日、対インド戦
試合前に宿で花粉症発症。「車中鼻詰まりて鼻汁不断に流れ出でて苦しんだ」（1923: 274）
8 月 18 日、シカゴ発　19 日、ニューポート着　23～25 日、対オーストラリア戦
初日「鼻の具合益々不良」（1923: 277）。試合中は小康、「わずかながら鼻孔が開いていた」（1976: 203）。
8 月 26 日、ニューポート発、ニューヨーク着　9 月 1～3 日、対アメリカ戦
試合中に「両方の鼻孔が完全にふさがっているため、口だけで呼吸している」（1976: 200）。「戦闘力を殺がれる枯草病に罹って思う様な活動が不可能とな」る（1923: 285）。
9 月　ホワイトマウンテンズ（有名な避粉地）で過ごす（『東京朝日新聞』1921 年 9 月 8 日夕刊）。
10 月はじめ　「いつの間に鼻の具合も快方に向かっていた」（1976: 213）。

1976 年版の自伝の最後に、熊谷は以下のように振り返っている。「せめてもあの呪わしい風土病とは道伴れでなしに、思う存分闘うことができたなら、と返す返すも残念に思っている」（熊谷 1976: 213）。

４．花粉症の社会的認知

熊谷が花粉症を経験した 1921 年には、日本からアメリカなどに移住した人々の一部はすでに花粉症に発症していただろう。少なくとも 1930 年代前半には、南カリフォルニアの日系アメリカ人の 3.5%に花粉症がみられた（Hara 1934）。

日本国内で花粉症の発症がみられるようになった 1960 年代以降も、しばらくは一般には花粉症は知られていなかった。花粉症についての社会的認知を高めるべく「鼻アレルギー友の会」が結成されるのは 1979 年のことである（斎藤編 1980; 住田 2020）。

【註】

1) 以下、熊谷（1923, 1976）。出典の確認できる記述に限定して上前（[1977] 1986）も参照した。

2) 全米ランキングは、1916 年 5 位、1918 年 7 位、1919 年 3 位、1920 年 4 位、1921 年 7 位。アントワープオリンピックのダブルスでは柏尾誠一郎と、デビスカップでは清水善造（ぜんぞう）とペアを組んだ。

3) 馬場らの全国調査では、1998 年 16.2%、2008 年 26.5%だった（馬場・中江（2008）、スギ以外の花粉症を含めた花粉症全体の有病率はそれぞれ 19.6%と 29.8%）。それから 10 年以上が経ち、以下の東京都の数字を見ると、40%を超えていてもおかしくはない。東京都（地区を除く）のスギ花粉症の推定有病率は、1985 年ころ 10.0%、1996 年 19.4%、2006 年 28.2%、2016 年 48.8%（東京都福祉保健局 2017: 28）。ウェザーニューズ社のアプリ「ウェザーニュースタッチ」におけるアンケート調査（2019 年 3 月 15、16 日、9,361 人、北海道と沖縄を除く）では、回答者のうち、全国で 58%、東京都で 64%が「以前から花粉症」または「ついに今季デビュー」と答えている（ウェザーニュース 2019*a*, 2019*b*）。

4) 2019 年 5 月に以下の方々に電話でインタビューを行った。スギ花粉症をはじめて報告し、花粉症に関する総説も多く残した斎藤洋三氏、1979 年から 1900 年代にかけて活動した「アレルギー友の会」元代表・事務局長の松岡良雄氏、日本テニス協会の小田晶子氏および小田氏が問い合わせてくださったテニス史に詳しい方々も、知らなかった。例外として、熊谷がデビスカップに出場した 5 年後の 1926 年から 3 年連続デビスカップに出場した鳥羽貞三（1901–2002）による証言がある（「鼻が悪くてね、今でいう花粉症ですよ。涙がよく出て、ハンディになっていました」（岡田 2000）。涙の症状については、これ以外の情報は確認できていない）。

5) 以下、花粉症の一般的な解説については、小塩（2020）、Jackson（2007）、Mittman（2008）などを参照。

【文献】

馬場廣太郎・中江公裕. 2008.「鼻アレルギーの全国疫学調査 2008（1998 年との比較）——耳鼻咽喉科医およびその家族を対象として」『Progress in Medicine』28 (8): 2001–12.

Hara, H. J. 1934. “Hay Fever among Japanese: Part I.” *Archives of Otolaryngology* 20 (5): 668–76.

井上栄. 1992『文明とアレルギー病——杉花粉症と日本人』講談社.

Jackson, Mark. 2007. *Allergy: The History of a Modern Malady*. London: Reaktion.

小塩海平. 2000.「花粉症と人類」（全 6 回）『世界』928–33.

熊谷一彌. 1923.『テニス』改造社.

———. 1976.『テニスを生涯の友として——熊谷一彌遺稿』講談社.

Mittman, Gregg. 2008. *Breathing Space: How Allergies Shape Our Lives and Landscapes*. New Haven: Yale University Press.

岡田忠. 2000.「1920 年アントワープ・テニス」（五輪伝説）『アエラ』13 (1): 70.

斎藤洋三編. 1980.『スギ花粉症——アレルギー性鼻炎のあなたに』すずさわ書店.

住田朋久. 2020.「花粉症の患者会」（研究手帖）『現代思想』48 (6): 238.

東京都福祉保健局. 2017.「花粉症患者実態調査報告書（平成 28 年度）」.

トリップアドバイザー. 2012.「世界三大花粉症と世界の花粉飛散カレンダー」「TRIPGRAPHICS」. http://tg.tripadvisor.jp/allergies/.

ウェザーニュース. 2019*a*.「2 人に 1 人が花粉症！？最も発症しにくい県とは」. https://weathernews.jp/s/topics/201903/180165/.

———. 2019*b*.「今季、花粉症デビューした？」. https://weathernews.jp/smart/sora_mission/BE/glance.html?missionid=1552450753.97786.

上前淳一郎. [1977] 1986. 『やわらかなボール』[文藝春秋社] 文春文庫.

（すみだ ともひさ　元慶應義塾大学文学部非常勤講師）